

シールがつかない自分になる

「おずかしい言葉を知ってるのや、すてきな歌を歌えるのもいた。そんな小人^{こびと}には、みんなお星さまをくっつけていった。お星さまもらうと気分は最高。だけど、なんにもできないぶきっちょな小人もいた。そんな小人たちは、醜いダメ印をくっつけられたんだ。」『You Are Special たいせつなきみ』（マックス・ルケード作・いのちのこば社フォレストブックス刊。一部漢字に変換して表示）という絵本の一節です。

エリという彫刻家が掘った「小さな木の小人たち」は同じ村に住んでいて、金ぴかのお星さまシールと醜い灰色ダメ印シールを持ち歩き、互いにこのシールをくっつけ合って暮らしています。体中ダメ印だらけのパンチネロは、「シールがつかない子になりたい」「お星さまやダメ印をくっつけあってる。あんなの変だよ」と思い、作り主のエリに会いに行きます。エリは、パンチネロにこう言います。「シールがくっつくようにしていたのは、お前自身なんだよ。どんなシールがもらえるかってことを気にしていると、シールのほうもお前にくっついてくるんだ。お前が私の愛を信じたなら、シールなんてどうでもよくなるんだよ。忘れちゃいけないよ。この手で作ったから、お前は大切なんだってことを」

私たちには変な評価癖があるかもしれません。人のことを「～ができるからすばらしい」とか、「～ができないから、あの人はダメな人だ」とかのシールを貼っていないででしょうか。「お星さまシールやダメ印シールのくっつけ合いは変だ」ということに気づいていないのです。

親も、子どもを誰かと比べて「うちの子はできている／できていない」と思い、「〇〇ちゃんは、～ができるんだって」と何気なく子どもに向けて言葉を発していないででしょうか。聞いた子どもは「〇〇ちゃんはできるけど、私はできない」と、親からダメ印シールを貼られた気になってしまうかもしれません。

子どもたちの社会は、教室だけでなく SNS など実態が見えにくいところにも広がっています。ここから受け取る言葉は、うれしいこともあれば辛いこともあるでしょう。「シールがつかない自分になる」と決意し、自分自身を肯定することが大切です。人から言われたことを何もかも受け取って傷つくことのないよう、「私は私」と思えるようになってほしいと思います。そのためには、身近な家族の声掛けが重要です。「あなたはとても大切な存在なんだ」ということを伝えていきたいと思います。

無意識にダメ印シールを貼っていないか、親は自分を確認してみましょう。お星さまシールやダメ印シールの代わりに「ありがとうシール」をくっつけ合うのはどうでしょうか。「手伝ってくれてありがとう」「花に水をやってくれたんだね。ありがとう」「いつもニコツとしてくれるよね。〇〇ちゃん的笑容を見ると疲れが吹っ飛ぶ。ありがとう」

「ありがとうシール」はどんな色でどんな形にしたらいいでしょうか。家族で話し合っ、さあ実践です。